

講座概要案

生成AIで学ぶ Difyクラウド・社内ナレッジ活用入門講座

Dify Cloud無料枠で、社内FAQ/RAGアプリ作成の流れを学ぶ実践プログラム

講座の位置づけ：本講座は、Dify Cloudの無料枠を使い、社内資料やFAQを生成AIアプリに活用する考え方を理解する入門講座です。

1. 講座の概要

本講座は、Dify Cloudを使い、社内資料やFAQをもとにした生成AIアプリを作成する流れを学ぶ入門講座です。Difyの画面操作を通じて、Knowledgeに資料を登録し、質問に対して関連情報を参照しながら回答する社内FAQ/RAGアプリを作成します。

活用テーマ	扱う内容	向いている関心領域
1. 社内FAQ/RAGアプリ作成	社内FAQ、業務マニュアル、製品情報などをKnowledgeに登録し、質問応答に活用するフロー。	問い合わせ対応、マニュアル検索、社内ナレッジ活用
2. 業務アプリへの応用	日報、報告書、メール文面、議事録整理など、社内文書作成や情報整理へ応用するフロー。	事務効率化、情報共有、文書作成支援

2. 講座の目的

本講座の目的は、受講者がその場で業務利用できる社内AIシステムを完成させることではありません。講座で作成するアプリは、学習用簡易アプリとして扱います。

- Difyを使ってAIアプリを作成する基本的な流れ
- Dify Cloudの画面構成と基本操作
- モデルプロバイダーやプラグインの考え方
- Knowledgeを使った社内FAQ/RAGの基本
- 学習用簡易アプリとして、安全な範囲で試す重要性
- 自社でAI活用を試す場合、どの業務から始められるか

3. 共通で学ぶ内容

Difyとは何か、チャットボット・Workflow・Chatflowの違い、App、Knowledge、Model Provider、プラグインの役割を確認します。あわせて、無料枠、クレジット、APIキー、利用制限に関する注意点を学びます。

共通パート	主な内容
Dify・生成AIアプリ活用の基本	Difyとは何か、チャットボット・Workflow・Chatflowの違い、業務で使うときの基本的な考え方を整理します。
Dify Cloudの基本操作	Studio、App、Knowledge、Model Provider、プラグインの役割、無料枠やクレジットの考え方を確認します。
KnowledgeとRAGの考え方	CSV、PDF、社内文書をナレッジとして登録し、回答に参照させる流れと改善方法を学びます。
安全に使うための考え方	AIの回答をそのまま信じない、社内資料の扱いを確認する、業務利用ではなく学習用簡易アプリとして試す、という前提を確認します。

4. メインテーマ：社内FAQ/RAGアプリ作成

社内FAQ、業務マニュアル、製品情報、作業手順書、問い合わせ履歴などを題材に、DifyのKnowledgeへ資料を登録し、質問応答アプリとして利用する流れを学びます。

学ぶこと

- Dify Cloudで新しいアプリを作成する流れ
- CSV、PDF、社内文書をKnowledgeに登録する方法
- FAQチャットボットとRAGアプリの違い
- テスト質問を使った回答精度の確認

ゴール：受講後に、Dify Cloudで社内FAQ/RAGアプリを作る基本的な流れを理解し、自社で小さく試すテーマを考えられる状態を目指します。

5. 無料枠で試す場合の注意点

作成時点のDify公式価格ページでは、Sandboxプランは無料枠として案内され、200 message credits、5 Apps、50 Knowledge Documents、50MB Knowledge Data Storageなどが掲載されています。条件は変更される可能性があるため、講座実施時には最新情報を確認します。

学ぶこと

- 無料枠で試せる範囲と制限を理解する
 - 社内資料を登録する前に情報管理ルールを確認する
- AIの回答には誤りが含まれる可能性があるため、人間が確認する

6. 講座の進め方について

基本的には、Dify Cloudの無料枠を使い、ブラウザ上で操作できる範囲を中心に進めます。講座では、構築の流れ、社内ナレッジ活用の考え方、AIの使いどころ、人間が確認すべきポイントをレクチャーします。

受講者自身のPCで操作することも可能ですが、PC環境、ネットワーク環境、アカウント作成状況、利用できるAIモデル、無料枠の残量などによって、講座中に同じ手順で動作しない場合があります。

そのため、本講座では、受講者全員がその場で業務利用用のAIアプリを完成させることをゴールにはしません。作成するものは学習用簡易アプリです。

7. クラウド版とOSS版の扱い

本講座はDify Cloudの無料枠を基本とします。希望があればOSS版DifyをローカルPC、社内サーバー、AWSなどで利用することも可能ですが、Docker、GitHub、サーバー、ネットワーク等を使った環境構築は講座には含みません。